



リステラス星圏史略
古資料ファイル
1 - 3 - 3



《ハユンのアマラーサ》

(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

《ハユンのアマラーサ》

『(水の大陸)』 (1986.05.15.の、「夢日記」より。)

『(水の大陸)』 (1986.05.15.の、「夢日記」より。)

2006年6月7日 連載 (2周目!・上古神代～水の大陸)

場所は.....古代地球、だったと思う。たしかにあの夢は。
古アトル・アンと呼ばれ、
アタラン (聖なる地) とも称えられていた、彼の地。

そしてまた、その夢の中では、
あたしはたしかに、もう一人の
あたし自身でもあったのだ.....。

+++++

アタランとも呼ばれる古アトル・アン。
南方の地は熱樹の緑気したたる。

ハユンのアマラーサ (マラー、マラーサ)。
アグニ (アグネ、アグニス) の トゥード。 (トゥー)

ナーラジャ (ナラージャ) 姫 = 水精、水妖。
アグマ = 地霊。

水の大陸
月女神・水精姫

大樹海
アルノス峠
寒い南方
熱い北方
デネドー
ジュノセシラス
アイデマール
ハンブリハイバ
魔の海。

アトル・アンのシリーズは、
むしろ烈女伝と言うべきで。

場所は...古代地球、だったと...思う。 (1986. 5. 15.)

場所は...古代地球、だったと...思う。 (1986. 5. 15.)

2016年6月3日 リステラス星圏史略 (創作)



1986. 5. 15.

場所は...古代地球、だったと...思う。

たしかにあの夢は。

古アトル・アンと呼ばれ、

アタラン（聖なる地）とも崇えられていた、

彼の地。

そしてまた、あの夢のなかでは、

あたしはたしかにもう一人の、

あたし自身でも、あったのだ...

ちなみに、
ずっと私が「幻視」していた地図（鳥瞰図）（図2）は...
かなり後日になって、
「凍る（火山と洪水と氷雪に沈む）前の南極大陸」だった。
というオチ（図2）が、発覚しましたよ...☆

http://diarynote.jp/data/blogs/l/20160603/85358_201606031730237898_2.jpg

1986. 5. 15.

アタランと呼ばれる古アトル・アン。

南方の地は熱樹の緑気したたる。

ハユンのアマラーサ。（マラー、マラーサ）

アグニ（アグネ、アグニス）のトウード。（トゥー）

ナーラジャ（ナラージャ）姫。（＝水霊／水妖）

アグマ。（＝地霊）。

『水月記』

『水月』

（水の大陸）

『探水記』

『捜水記』

『月神女』物語

『月の神女の物語』

『月神水精』

『月神女・水精姫』

『月水記』

~~『ハユンのアマラーサ』~~

タイトルで、苦戦しております...w

「月水」とか

「水月」とか、辞書で引いては、

「違う意味がある！」と知って、ボツ。

というような作業をしばらくやっていた、中学生？でした...ww

アトル・アンのシリーズは、むしろ「烈女伝」とも言うべきで。

〈カリンシカ〉

～発心～

『水の大陸』 ～カリ・ン・シカの満月～

[『水の大陸』 ～カリ・ン・シカの満月～](#)

2006年4月22日 [連載 コメント \(2\)](#)

これもやはり大陸の伝承詩上に名を残す、剣の天才にして月女神の聖巫女でもあるハユン・オノ・アマラーサと、その幼馴染みで元許婚者でもあったアグニス・オノ・トゥードの、諸国放浪の物語。

すれちがいの恋愛模様ありーの、天下を乱す大陰謀の謎解きと悪人（悪神）討伐ありーのの、異世界（超古代）ものファンタジー風、じつは水戸黄門漫遊記、だと思って頂ければ、ぜんぜん間違いないかも……。 (笑)。 (^◇^;)d'''

『-それゆえに むかしがたりを はじめよう-』 (日付不詳。1991.08以降)

[『イメノナエノナアイムン-それゆえに むかしがたりを はじめよう-』 \(日付不詳。1991.08以降\)](#)

2006年6月14日 [連載 \(2回目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

(冒険譚・梗概)

ハユン家の養女アマラーサは《谷》の一族の生まれだ。八年前、童子送遣（センドレーサ）の伝統に従い戦士の村ザグへ献納されて来た。いずれ《谷》の危機を救う者が出るという、一族の予言を成就させるために。

守護童子（センテンティア）を選ぶ神前試合で最後まで勝負がつかず、先例のない二人童子として遣わされた相棒の名はアグニス家の長子トゥード。それまで面識のなかったふたりはザグの村に《谷》の血統を絶やすなという不文律により、その時から掟の定める許婚者となった。

古くは《[水]の結界》（アトル・アン）ともよばれたこの大陸（ティス）には複数の民族が住むが、絶対多数を占める大陸人（ティセラタン）は造物主ティアスラアルを謀殺して以来みずから「祖神（おや）殺し」を名乗り、超越者に頼らず生きることを誇りとしている。

数多の神々がヒトの驕りを見捨てて去った惑星で、《異》や《魔》とよばれる者たちや《谷》の一族のような他界からの移住民は、風や水の精霊の加護をうけて昔ながらの暮らしを続けていた。

唯一、特異なものとして、しかし広く認められている月女神（レリナルディ）信仰は、満月の夜に死を恐れず荒野へ出て祈る者にはすべての掟や法則から解放された「まったき自由」が与えられると説く。

ザグの村で戦士としての修業を積み弱者を護るための旅をくりかえすうちに、アマラーサは月女神の教えに魅かれた。《谷》の守護者である義務を捨て、《闇に輝く》（レリナルディ）そのひとにまみえたのは二年まえ。人を超え、《仙》と呼ばれる無限の力を得ると同時に、彼女と許婚者を結びつける絆もまた消滅した。

無断の行動に傷ついたのはトゥードである。出会った時から美貌の少女の恋していたし、力強い女戦士をまた親友とも考えていたのだ。

ザグの村では有数の使い手である彼も《仙》士が相手では敵すべくもない。動揺を顔には出さずただ修業も怠りがちに無為な日々をおくる。

『カリンシカ』 (日付不詳)

2006年6月15日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

発心 (ほっしん)、というのだろうか。その他火 (たひ) に出 (た) つべきときが私を訪れたのは、涼気をよぶ亜熱帯の月がわずかに欠けを見せる、季節のはじまりだった。

てばやく荷をまとめ、村をたばねる老にだけ出立を告げて歩きだす。眼下の斜面でもう夕刻だというのに、ひとり鍛錬にはげむあいつの姿があった。

彼が負かしたい相手はしばらくいなくなる。永遠に、とあるいは言うべきか。今度の旅がかなえば、私はきっと異 (ちが) うのだろうかから。

.....怒るだろう。

まして黙って去るならなおさらだ。これまで私はいつでも、武者修業に足がおもむく前にはあいつに断わりを入れていた。

あいつが、私にたいしてそうするように。

~~.....言わずに出てきた。~~

~~きどかし、本当に、怒って拗ねるのだろうと、笑う彼女につられるように野營の火花がは
じけ、姿をあらわした最初の細い月が静かに荒野を観ていた。~~

神

|

聖

|

尊 >

| > ここまでは「人界」に属する。

仙 >

| ...>.....

貴 > < 以下、「俗界」。

『 冒 險 譚 』

『 冒 險 譚 』

『(水の大陸)』 (1986.08.23.の、創作メモ帳より。)

[『\(水の大陸\)』 \(1986.08.23.の、創作メモ帳より。\)](#)

2006年6月8日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\) コメント \(5\)](#)

1. ハユンのアマラーサ。
2. ナズディアのヴラーン。
3. アリティア。
4. 精霊。
5. ハユンのアマラーサ。

『マラーサとその恋人xxx。 <アグニスのとゥード。
ふたりの物語が古アトル・アンに地にひろまるのは、
これからのことである。』

『その頃、いまだ彼の地では、10人単位の人動きを超える争いごとというのは存在しなかった。いくさというものは.....すくなくとも表面的には.....郷と郷を代表する戦士たちによる、双方の長老立ち会いの、一騎打ちに他ならなかったのである。』

☆ 叙人詩 (ラグリナーサ) 英雄伝。

☆ 炎銀 (ミスリル) の旅 リリィ・カタナ。

『冒険譚 - ハユンのアマラーサ - 』（たぶん1986年末頃の。）

2006年6月8日 [連載（2周目!・上古神代～水の大陸）](#) [コメント（3）](#)

プロローグ ～ 出立の光景

1. 樹海 ～ 旅立の説明

~~2. ヤチダモ族と嵐~~

3. 隊商宿

冒険譚 - アウルア・ウルウィア・ウルワニス -

ハユンのアマラーサ

アグニスのトゥード

アザール・ノミケ（アザールと18人。）

イオリア、盗賊村

ジブの八脚虫

あたたかい／ぬるぬるのぺのぺした／泥の中で／ヤチダモ族は唄うよ。

（海にのまれる泥のくに）

ひとの越えない カリンシカ

ザグの村 セドの泉水

アトル・ウルワニ / あうるわ・アウルア

トカレス

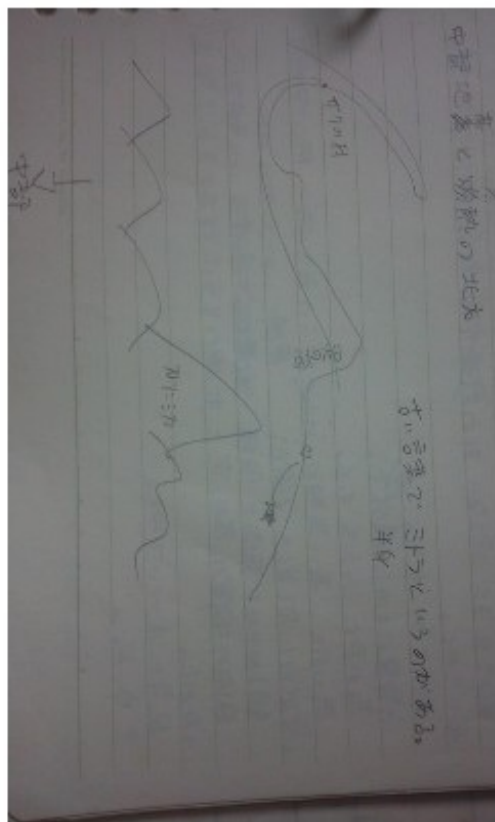
センド・レーサ（児童戦士）の伝統

呪文（オラムニ）

中部亜熱帯地方と灼熱の北方。（地図）

ザクの村 泥の海 カリンシカ

古いコトバでミトラ（半身）というのがある。



『冒険譚－ハユンのアマラーサー－』 (たぶん1986年末頃の。)

2006年6月8日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(3\)](#)

冒険譚 – アウルア・ウルウィア・ウルワニス –

鳥が、ふいーく、ふいーく、と鳴く。

ここはザグの村だ。

夜明けだ。

カン高い声で、ふいーく、ふいーく、ふいーくれく、と鳴く。

ザグの村は絶壁の腹にしがみつく、いくつもの洞窟の集落村だ。

半島の上から見下ろす、背なに当たる太陽の熱さ。ソイレカ島が一番光を告げる頃、村の前にあるわずかの傾斜地には白い霧が渦巻き、まだ蒼い薄闇と、白い霧とが踊る。

太陽の棲む熱い北の海からの潮流を遮る形で伸び出す《指の岬》。その西壁に張り付くようにして、剣聖ザグは彼の弟子たちのための修業の村を建てた。

ザグの村は戦士の村である。

明るさをまだ迎えない村の斜面を丈高い姿が歩いて行く。

すらりとした、女だ。

均整のとれた体格だ。

鳥の声に、上を向く。

黒い目に、長い黒髪の、けれどここらの者ではない、陽に灼けてはいるが白い肌をした人間だ

。

鍛え抜かれた筋肉と同様、しっかりしたアゴの線の、いい表情をしている。

目的の洞窟の扉の、窓の前に松明の灯ったままなのを見て、顔をしかめた。

足早に近付いていく。

「ウード！」

慌てたように振り向いた青年の、右目には、みごとな青アザがあった。

「……おまえか。」

憮然とした反応に、訪問者の声が笑いを含む。

「ひとの気配にも心づかんで、よるの夜明けに何をやっている。」

「見て、解らんか？」

「なるほど。」

手には薬壺と、包帯にする麻布を持っている。

「派手に、やられたな。」

「誰のおかげだ。おまえ、あいつらに何を言ったんだ？」

「……べつに。おまえ一人では心許ないから、付いて行くと。」

「……わあ〜良かったな！」

「事実、剣で5本に3本、弓ではほとんど必ず、私に負けるだろうが。」

「ほっておけ！ どうせおまえは《剣聖》様だよ！」

2006年6月9日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

プロローグ・ 出立

海鳥がふいーく、ふいーく、と鳴く。

ここはザグの村だ。

夜明けだ。

かん高い声でふいーくふいーく、ふいーくろく、と鳴く。

ザグの村は絶壁の腹にしがみつく、いくつもの洞窟の集落だ。

湾のむこうの山かげからソイレカ鳥が一番光をつけるころ、村のまえにあるわずかな傾斜地にはまだ蒼いうす闇と、白いもやとが残る。

太陽神の住まう熱い北の海からの潮流をさえ切って、のびだす指の岬。

その東壁にはりつくようにして剣聖・ザグは彼の弟子たちのための修業の場を建てた。

ザグの村は戦士の国である。

明るさをいまだ迎えない、かの地の前庭をたけ高い人影が歩いてゆく。

すらりとした女だ。

均整のとれた体格だ。

黒い瞳に、たばねた長い黒髪の、けれどここいらの土生の民ではない、陽に灼けてはいるが淡色の肌をした人間だ。

鍛えぬかれた筋肉と同様、しっかりしたアゴの線の、いい表情をしている。

目的（めあて）の洞窟の窓に明かりのともったままなのを見て顔をしかめた。

足早に近付いて行く。

「ウード。はいるぞ。」

声をかけると同時にたれ幕に手をかける。と、あわてたように振りむいた青年の右目には、みごとな青アザがあった。

「.....おまえか。」

無然とした反応（いらえ）がかえる。

「ひとの気配にも心づかんで、夜も明けぬうちから何をやっている」

「見て、わからんか？」

「なるほど。」

手には薬つぼと包帯にする麻布。

黒目黒髪、女とおなじ民族の外観をもつその大男が、ひとり全身の怪我の手当てにとりくんでいるさまは、幼なじみでなくとも滑稽なみものである。

「派手に、やられたな。」

「誰のせいだと思ってる」

「わたしの責任なのか？」

薬草がしみて顔をしかめるあいだの沈黙。

「おまえ、あいつらに一体なにを言ったんだ」

「べつに。おまえ一人に任すのでは心もとないし、わたしの故郷のことでもあるのだから、ついて行くと。」

「わあるかったな。おかげでこのザマだ」

「事実、剣で五本に三本、弓ならほとんど、私に負けるだろうが。」

「ほっといてくれ、どおせおまえはミスリルの剣の持ち手だよ。……うああ、こんなやつにわざわざ惚れる男どもの気が知れないっ」

「でかい図体してスネるな凡才。……で、戦果は？」

「と一ぜん。」

勝った、と、胸をはって見せるのへ、月神の守護者である女戦士（ルワ・ヘルマ）ははじめて笑顔をむけた。

軽い身ごなしで立ちあがる。

「セドの泉水をいただいて来よう。いまから冷やせば、出発までにはその腫れもひくだろう。」

「頼む。」

持参したケウドの肉の皿を置いて立ち上がる、その姿は見送らず、ワードと呼ばれた男－アグニスのトワードは、さっそく自分の朝食にと遠慮なくかぶりついていた。

たいした挨拶がかわされるわけでもなく、通いなれた崖の道をぬけて村落をあとにする。

二人とも、旅ははじめてではない。ザグの戦士には武者修行の習慣がついている。

岬のつけ根からは地平にさしそめた黄金の矢をめざして進路をとった。高原の最端部をたどってゆくかすかな獣道である。

断崖をつらねて急激に落ちこむ台地の下方、樹木のおいしげる岸辺から、はるかに広がっているのはソル湾から外洋へとつながる熱帯の海。

右に目を転じれば、カリンシカ連峰の優美なすがたが、淡い紫にかすんで彼方につらなっている。

この地に特有な晴天のもと、刻々とその色彩をかえる鮮やかなエメラルドの海流を見おろしながら、一路、東へ。

三日ほどして、村の狩猟域をくぎる小さな峠をこえた。

下れば、さいしょの樹海である。

半日もたてばまた消えてしまう細い街道の名残りを、剣をふるって交替に切りひらいた。うしろに立つほうは、弓に矢をつがえて危険な小動物の警戒にあたる。

森のなかは騒々しいほどの原色で、

「ここはあいかわらず暑いな。」

いくどめかの休憩で、ウッドがぼやいた。

「ああ、この湿気がな。」

うなづく女戦士は、しかし相棒とちがって汗のひとつもかいてはいない。

「おまえは涼しそうに見えるぜ。」

彼女、ハユンのアマラーサは呪文（オラムン）を扱う家の生まれである。ひとりだけ何か唱えでもして熱気を断っているならズルイやつだと、むけられた疑惑の目に、

「修業のちがいだろう」

笑って、とりあわない。それは事実ではあるので、ウッドはぶすくれる。

道みちに調達する毎日の食糧も、きっかり五対三の割でアマラーサの方が多し。ウッドとてけて腕のない狩人ではありえないのであるが、彼女は、といえば、天才なのである。

生涯不婚の月神戦士（ルワ・ヘルマ）たる誓いを樹てるほどの女は、ザグの修業の村においてさえ特別な存在だ。

児童供託（センドレーサ）の伝統にもとづいて十歳のときにザグの村へとさし出される子供の、選出のための神前試合に決勝であたって以来、ウッドがアマラーサに勝ちを宣したことはほとんどない。ハユンの一族は、もともとの武家ですらないというのに。

その、思い出のかなたにある、故郷。

今回かれらの旅には理由と目的があった。

ウッドが、夢をみたのだ。

呪文使い（オラムニ）の生まれでもないくせにとアマラーサは笑ったが、はじめはかすかに、しだいに明瞭になったその伝言は、温暖な中北部地方の守り神である水霊（アトル）、アウルア・ウルウィアからもたらされたものだった。

－拐（さら）われた。

というのである。

水霊をうばわれては豊かな郷（さと）に雨はふらない。

川と森林のアマラーサの氏族はまだしも、小麦地帯であるウッドの村のあたりは大打撃であろう。

そういう時のための供託戦士である。

ウッドは、決意し、アマラーサはそれに従った。

水霊女神（アトル・ウルワニ）、救出。

てがかりは海に沿って東方へということだけである。

凶作はせめて一年で終わらせたい。

ふたりは、あてもないままに道のりをいそいでいた。

ルワ・ヘルマ エル・ヘルマ
ルワ・ブラダ エル・ブラダ

※ 冒頭に、シャープンと鉛筆描きの二人のイメージイラストが入っているのですが、皆さんにお見せ出来ないのが残念？です……☆

(笑)

《ハユンのアマラーサ》 ～彼らの旅には理由と目的がある。～

《ハユンのアマラーサ》 ～彼らの旅には理由と目的がある。～

2016年6月8日 リステラス星圏史略 (創作)



(これは没になってた (書き直しで消された) 部分)

旅立ちの朝を、完徹、包帯だらけの姿でむかえるはめになったわけだ。

が、大男の機嫌はいがいに悪くない。

見送りのなかにはもっと悲惨なていたらくの者がいるのである。

さらに二人ばかりは、起きられもしなかったらしい。

「長老、それでは」

「うむ...気をつけてな」

たいした挨拶がかわされるわけでもなく、通いなれた崖の道をぬけて村落をあとにする。

二人とも、旅ははじめてではない。ザグの戦士には武者修行の習慣がついている。地平から射しそめる金色の矢をめざして道をとる。左手下方、はるかにひろがっているのはソル湾から外洋へとつながる熱帯の海である。

~~この時間、まだ暑くはない。~~

「木舟が使えるとよかったのにな」

よく漁に行く、白い砂浜へとつづく分岐路を眼下にとらえたときに彼は言った。

「しかたあるまい。この季節では冬の潮流が強すぎる」

"冬"というのはあくまでも、寒い南方の文化が使いならわした呼称である。

山脈と海とにはさまれたこの地帯に、四季の温度差などはほとんど感じられない。

刻々とその色彩を変える濃いエメラルドの湾を見おろしながら、一路東へ。

三日ほどして、村の狩猟域をくぎる峠を越えた。

たいした挨拶がかわされるわけでもなく、通いなれた崖の道をぬけて村落をあとにする。

二人とも、旅ははじめてではない。ザグの戦士には武者修行の習慣がついている。岬のつけねからは地平に射しそめた金色の矢をめざして道をとった。高原の最端をぬってゆくかすかな獣道である。

断崖をつらねて樹木のおいしげる岸边へと落ちこむ台地の、相對する側には数週間の道程をはさんでカリンシカ連邦の優美な姿が浮かびあがっている。

左手下方、はるかにひろがっているのはソル湾から外洋へとつながる熱帯の海。

すっかり明けきった、この季節に特有な好天のもと、刻々とその色彩をかえる濃いエメラルドの湾を見おろしながら、一路東へ。

三日ほどして、村の狩猟域をくぎる小さな峠をこえた。

下れば、さいしょの樹海である。

彼らの旅には理由と目的がある。

ウードが、夢を見たのだ。

はじめはかすかに、しだいに明瞭になったその伝言（メッセージ）は、彼らの故郷の守り神である水霊・アウルアから放たれたものだった。

...拐われた、

というのである。

水霊をうばわれては豊かな中部地方に雨は降らない。

河と森林の相棒の氏族はともかく、小麦地帯であるウードの村のあたりは大打撃であろう。

児童戦士（センドレーサ）の伝統にもとづいて十歳のときにザグの村へと差し出された

2006年6月10日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

1. 嵐

ようやくに樹海の熱気から抜けだせようかという数日後、おいしげった植物群のほとりちかくにたたずんで、アマラーサが、ふと、なにかを指さして足をとめた。

「妙だな。見ろ」

「どうした？ マラーサ」

これが最後のひと丁場と、のこり数尋（ひろ）の雑木を怪力と大剣でもってばったばったとないでいたウッドが手をとめて戻ってくる。

「この道祖神（みちがみさま）。」

「.....これが？」

疑問符のさきにあるのは何の変哲もない、黒石でできた道しるべの像である。過去いくどかの樹海抜けをするたびに、いつも見てい.....

「あ!？」

「気づいたか」

位置が、ちがうのである。

「この前わたしが通ったときには、これは確かに樹海のきれた[外]にあったんだ。そこで休んだ覚えがあるのだから間違いない。」

「てえことは」

「まわりの樹を見ても。この像より光に近い植物は、みなまだ若いぞ。」

それは本当だった。何千季節を変わることなく茂っていたタチモスの緑の海は、ここわずか1～2年のうちに20尋ばかりもその領土をひろげようとしているのである。

「妙だな.....」

「ああ、妙だ。」

かといって足をとめてうなっていたところで事態のかわるものでもない。大きな町の知学売りでもあるまいに、あてもなく悩むことなど戦士の職分からは遠い。

十分に注意をはらって残りの行程を切りひらき、その日は、はるか樹海から離れてしまうまで、ふたりは野営をさけた。

そして、翌日。

「とんでもねーっ！」

なんともいえぬイヤな予感にふと空をふりあおいで、すっとんきょうに叫んだのはウッドの方である。

「え？」

北の方、いまは距離のあいている海のうえから、どこまでも青い空をやぶって、暗雲のかたまりが姿を見せている。

「……なに？」

こんな時節に雨期がおこるはずはない。

否定するそばから嵐神はその版図をひろげ。

めったにないことだがアマラーサがうろたえた。難を避けようにも右も左も、ただ一面の草原地帯である。

むきだしの肌にうちつける雷雨に体熱を奪われる。熱帯で暮らす人間にとって、サバンナで遭遇する嵐ほど恐ろしいものはないだろう。

「どうする？ 樹海まで戻るか」

ウッドが後方の地平にわだかまる緑のかげをさす。

「いや、かえって危険だろう。それにどうせ間にあうまい。」

シーズン中だったとしてさえ異例の速さで進軍してくる雲塊に、はやくも、朝もおそい黄金の太陽が閉ざされ。

世界がかげの一瞬、さっと水をふくんだ重たい風がはせぬけていった。

これからどんどん気温が下がる。

吹きつけるものに、雨滴がまざるようになった。

「……あちらだ。」

道からややはずれた前方をアマラーサはさす。

なにかをいう前にウッドは走りだしている。

野生の獣にも似たふたりの疾走者だ。

サバンナを、その動物群はといえば何処へ逃げたのか姿もない。

昏い。

狂気の最初の一陣が、叩きつけるように左から右へとあおる。

体重が軽いぶんアマラーサがまかれた。

走りつづける、ウッドが、片手を伸ばして彼女を引きもどす。

「すまん。」

「なに。」

寡黙にただ安全を求めて馳せる。

いまや嵐は世界を占めていた。

いったん吹き荒れたら、幾夜眠られぬ夜が続くものか。それは、おとに知られた大陸のはずれの激しい狂宴だ。

はためく雷光。

心胆ゆるがす大音響。

ざっ、と目のまえで草原が薙（な）がれひれ伏す。

次の一瞬には逆の風にあおられて、昏い銀色の渦をまく。

大地を蹴る。大地を蹴る。

稲妻と渦と闇のなか、ただひたすらに突き抜ける。ま濡れて脚をからめる草藪の、腰の強さが邪魔になる。

「ええいっ、このっ」

幾度目か、足をとられかけて怒鳴ったのはどちらだったのか。

ひとくちに草原といい、平原と呼んでも、それはけして遠目ほど平らかではない。

シャン、と嵐の轟音のさなかでさえ耳に冴える鮮やかな手さばきで、アマラーサが無音のままその剣をひき抜いた。

炎銀である。

呪句（オラムン）の詠唱につれて新月に似た炎銀（ミスリル）の輝きが讚月祭の夜ほどの明るさを放ちだし、と同時に、持ち手の光魂に応じて淡い黄金（こがね）に染まる。

誓言をたてた女戦士（ルワ・ヘルマ）にしか許されない術ではあった。

闇と嵐の草原を、光に包まれた二人組が疾駆する。

「あれだ。」

「おう。」

二刻ほどもたっただろうか。ずぶ濡れになって彼女が示した先には、ステップと海岸部とを仕切る岩だらけの丘陵地帯があった。

迷っているひまはない。道などあるはずもない岩肌にとりついて、よじのぼる。雨が腕をすべらす。渦まく風が横なぐりに吹きはがそうとする。

ずいぶん難渋して小さな峠から尾根を乗りこえると、海までまだだいぶ距離があるにも関わらず、潮のまじった突風が千人並んだ楯のように一斉に叩きつけてくる。

「うえっ」

ウードの悲鳴をよそに、だが、その昔は火吹き山だったというこのゾレト山稜のこちら側には、複雑な形の洞（ほら）が多い。

「……あそこにしよう。」

うまい具合に風向きから隠されたひとつを探して、ふたりはようやく息をついた。

長時間の疾走のおかげでずぶ濡れになっても体は冷えてはいない。とはいえ、消耗は激しい。

呪句を使ったアマラーサはなおさらのことである。

「人間ランプ」

「うるさい。」

常人離れにますます磨きのかかってきた相棒に軽口をたたきつつ、剣（つるぎ）の余光の失せきらないうちにとトゥードは手早く火口（ほくち）の支度をする。

幸い、このての天然の洞（ほら）で燃料にこと欠くことはあまりない。乾期のこととて – そのはずだったのだ – 結実したまま枯れて次のシーズンを待つ、ふかふかしたコケシダに、一面が覆われている。

炉床にする分を切りはがしてのけた。

「すこし休んでろ。メシの仕度なんざ一人いりゃあ十分だ」

「……………飯……………。ったく、この体力男がっ」

あきれたように呟きつつ、自分で積みあげたコケシダの山にもたれて素直にアマラーサは寝入ってしまった。

月神戦士（ルワ・ヘルマ）はただの男戦士（エル・ヘルマ）よりもはるかに夜目の利くものだという事実を、ふたりはお互いによく知っている。

背袋からよくこれだけと思うほどの食料をゴタゴタと取り出したウッドはしばらく迷ったあげく、気に入りの乾肉をあきらめてマラーサの好きな煮豆料理をこしらえることにした。

外は、荒れている。

（どうせなら天気ごと変えてくれよなあ）

そんな術力を持つ人間は、いない。

長く待たされることになりそうだった。

2006年6月10日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

目覚めると、歌声である。

ウッドをはじめ、アマラーサが歌っているのかと思い、彼女はといえば子供のころの夢をみていた。

やがて同時に、ふたりではね起きる。

.....明るい。

晴れている。

四日ぶりにようやくすべての音のたえた[外]から、ずいぶん遠くからその歌の音（ね）はきこえてくるらしかった。

消えかけた白いたき火をはさんで顔を見あわせ、すぐさま行動する。

大気の澄みわたった世界は早朝。

そして地勢は、まるきり一変していた。

「.....ウソだろう、おい。」

眼下にひろがる一面の泥の海を見てウッドが呆然とつぶやく。

海、というのは比喩にはならない。本当に、はるか見わたすかぎりの - おそらくは実際の海岸線にゆきあたるまで - ただ泥、なのである。

虹の鮮やかさをあわせ持つ銀の色

淡い黄金のオーラの持ち主。

ウッドはたぶん炎銀色だろう。

[『\(タイトル未定\)』 ... 水の国の歌談 \(うたがたり\) ... 1 \(1996.10.12\)](#)

2006年6月11日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

晴崖の章 二人が旅に出る。南を目指す。
旅の理由と、村と谷と月巫女の説明。

暗雲の章 原人族ヤツイダモと遭遇。
水の大陸「神話」の説明。
(人族の種類)。方向転換。

緑霧の章 二人の関係の説明。
娼婦に出会う。
町の噂をひろう。
トラブルに巻き込まれる。
方向転換その2。

碧風の章 碧照 (フェンテル) 国門で恋歌を唄う。
王太子のプロポーズ。星船遺跡を訪ねる。

月天の章 一行三人で、荒野を目指す少女を拾う。
フクザツなウード。荒野で月女神と会合。

暁闇の章 黄沙の王を倒す (?)。水霊を谷へと還す。

付・「月天の章」拾遺 月下でアムがウードに謝ったこと。
その夜の二人の消息。
月女神殿について。

.....

《水霊》と《風霊》：

《森の谷》を守る精霊族の束ね。半物質の存在。かつての大災厄で《地》と《火》を失っているため力は弱まっている。女性体のイメージ同士だが、関係としては恋人に近い。

《月女神》（レリナルディ）：

本人(?)の弁によれば【神】ではなく【監視者】である。《月宮殿》と呼ばれる光球に居住している。大きすぎる頭と子供のような肢体の、だが文句なしの美形。寛容な性格だが、判断基準は常人には判らない。

アマラーサの能力は高く評価して（気に入って）いる。

男嫌いらしい。

アグニスのと・ウッド（ウッド）＝（アグニス谷の一族のウッド七世）：

《森の谷》出身の奉獻童子。義崖（ギガイ）の村の若手ではNo.2の戦士。（一番はアマラーサ）。

根っから陽性で単純明快な思考法の持ち主だが、事実上の許婚者であったアマラーサに一方的に婚約破棄をされて以来、少々グレている。

一応主人公。

ハユンのアマラーサ＝《革細工（ハユン）谷》の《謎（アムル）の愛しい（アル）子（アサ）》：

森の谷の捨て子。義崖の村のNo.1戦士だったが、出俗して月女神の巫戦士となる。人界のすべての法より自由。いささか口の悪い知恵者であり、知識欲・探求心が強い。身分を隠して旅する時の名は歌姫《眉びきの君》。

月巫女として様々の不思議の技を使える。

弓の名手。

（なまえなんだっけ？）：

碧照国の王太子。独自の星船神話を持つ。

自称「おかげりの遊び人」だが、実権はきっちり把握している。あなどれない辣腕の行政官。月巫女に、それと知って求愛できる根性と知識の持ち主。陽気な皮肉屋で、芸技・学問等はほとんど万能である。

王家の先祖と月女神族とは特別のつながりがあるらしい。

.....

（※それぞれイメージイラストが描いてあるのですが、
皆さんにお見せ出来ないのが..... 以下略。(笑))

(キャラ設定) (1996. 10. 12.)

(キャラ設定) (1996. 10. 12.)

2016年6月9日 リステラス星圏史略 (創作)





水の十字架。 (中学生)

[水の十字架。](#)

2016年6月3日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

水の十字架

水の守護符。

共通点： 銀に水晶を象嵌した珍しいものである事。

『 かれらのそのごの物語 』
（仮題）

『天碧（あお）き星よりの歌』by 斎真扉（とき・まさと） （着筆1991年、秋）

[『天碧（あお）き星よりの歌』by 斎真扉（とき・まさと） （着筆1991年、秋）](#)

2006年6月15日 [連載（2周目!・上古神代～水の大陸）](#) [コメント\(1\)](#)

.....《碧天（フェンテル）》王家の七恋歌

-あるいは、星よりきたる青銀の船のこと-

口上 ・ 剣士にして吟遊詩人 一、
一の歌 ・ 星華蘭の雅歌

星華蘭 - ひともとの花にまつわる雅歌（うたがたり） -

まえの村で売られようとする薄幸な孤児（こども）たちのために有り金ほとんど投げ出した。その結果がこれである。

「財華の入市税はひとり七ソル（銅貨）。一年前にはそうだったはずだが」
憮然として腕を組む男は徒歩（かち）での長旅に汚れた姿に長剣を吊り、荷駄の一頭も連れてはおらぬ。

市門を守る兵たちはあからさまな表情を浮かべて逆手に槍を構えた。

「あいにくと昨秋の祭りから、ひとり三ラソル（銀貨）になってな」

「暴利だ。財華は自由な商いが自慢の都邑（みやこ）だろう」

「さればこそ、食いつめ者など市（いち）には無用、治安が乱れるだけとの、大公様のおおせよ」

紋章をカサにきて言いたいことを口にする。富裕な都に雇われるだけあって腕も確かであろう衛兵隊は数も多いし、片手で黙らせて押し通るといふわけにも行かぬ。

「~~~~っ。やつの言いそうなこったぜっ」

もとより知り人のいる街で無用な騒ぎを起こすのは本意ではないのだ。そうこうするうちにもうしろに検門の順番を待って、行列ができはじめる。

どうする？ と、まだ若い旅の戦士は背後の連れをふりかえった。

若い、女である。

こちらもわずかばかりの荷を背に負って長剣と小弓をたずさえただけの仕度。

ほこりと陽光をさけるためか薄布をまぶかくかぶっているが、均整のとれた長身の肢体といい、かいま見える切れながの黒瞳といい、兵たちの関心をひくには十分に過ぎる。

その、まれにみる美女と二人連れであることで自分への風あたりが余計にきつくなるのだとは

、呑気な本人は気づいてすらいないが、女の方にはしっかり自覚がある。

「金はないなら作ればよいのであろう？」

苦笑を秘めたまなざしで問い返すその指には、ごくごく小さな銀づくりの豎琴がいつのまにか握られていた。

「放たれた故郷とはいえ我らは本来《谷》の民。ひさびさに伝来の技で生計を立てても路銀を稼いでも、バチはあたるまいと思うぞ」

とたんに男は嫌そうな顔になる。

「戦士たる身が大道で、歌舞で路銀を得るとほを売るしかないとは情けない……」

「それを私に言えるのか、おまえが？」

剣の技倆においては彼女のほうが格段に上である。

「オレに唄わせるつもりか？」

—「当然だ。まい声なのは知っている、隠すな。」

……そうだな、せっかく二人いるのだから……、『星華蘭の雅歌』がいい。覚えているだろう？」

「おい、待てよ、オレはまだやるとは……!!」

連れの抗議など黙殺して、さっさと歩き出した女戦士は城壁を背にとって隊商たちと向かい合う。

「お聞きのと通りの故（ゆえ）にてかたがた、吟遊詩人の最初の一弦、一刻ばかりのお耳よごし、御容赦願いたい。

……それは昔の物語。西のかたなるアルヴェの岬に《碧天》（フェンテル）という小さな国があり、」

和音。旋律……前奏。

しょうことなしに唄いはじめた青年の声が青空のしたに広がった。

星妃香蘭

星銀の星船

天碧き星よりの歌

天碧き地の者たち

尊貴真扉

—東木真土

齋 真扉

朝 真扉

東輝真扉

尊貴真扉

まえの村でさちうすい孤児たちのために有り金ほとんど投げだした。その結果がこれである。

「財華（ザイカ）の入市税はひとり七銅貨（ソル）。三年前にはそうだったはずだが」
無然としてうでをくむ男は長旅に汚れた姿に長剣をはき、荷駄の一頭もつれてはおらぬ。

市門をまもる兵たちは軽侮もあらわに槍杖（そうじょう）を交差させ、

「あいにくと昨秋の祭りから、ひとり三銀貨（ラソル）になってな」

「暴利だ。ここは自由な商いが謳（うた）いの都邑だろう」

「さればこそ、食いつめ者など市（いち）には無用との、大公様のおおせよ」

治安が乱れるだけで役にもたためぬ穀潰し、とはまた紋章をカサにきて、放言したものだ。

富裕な都に雇われるだけあって腕も確かであろう衛兵の一小隊は片手で黙らせて押し通るとい
うわけにも行かぬ。

もとより無用な騒ぎを起こすのは本意ではないのだ。そうこうするうちにも検門の順番を待っ
てうしろに行列ができはじめし。

「～～っ。やつの言いそうなこったぜっ、あのxxxのxxxx！」

肉体的欠陥をあげつらうのがけして上品とはいえないのは万国共通なのだが。

為政者と知己でもあるような不遜な悪態をつく血の気の多い男は、兵どもの反応なぞどこ吹く
風で、ほこりまみれの陽に灼けた顔を背後のつれにふりむけた。

「どうする？ マラーサ」

問われたのは女である。揶揄する口調で、

「ウード、わざわざ喧嘩を売りに来たのか？」

(慈弦のひびきの最後の調律。) (日付不詳)

『 』 (無題) (日付不詳)

2006年6月15日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

ヴァラン ヴァラン ...

慈弦のひびきの最後の調律。

バルララン！ バルララン！

龍琴の音の力強さ。

ほら貝が天に哭く。

地をもゆるがす鼓の波音（パールラ）

楽人の声たからかなる、

讃えよ！ 今日のこの日を。

アグニス の トゥ・ウッド

アグニス の トゥ・ウッド

ハユンのアマラーサの相棒。のち、その子の父。

《谷》の出身で、アマラーサと同じ年期の〈センドレーサ〉（守護戦士見習い）に選ばれ、修行に励む。

良き戦士、良き父、良き歌い手として知られた。

・ 主な登場作品

『水母大陸史略』

『冒険譚』

『碧葉国の七恋歌』

『谷の一族』

『 《白の一族》 縁起 』 (なんつって未詳である)。 (1990.12.12.嵐★)

『 《白の一族》 縁起 』 (なんつって未詳である)。 (1990.12.12.嵐★)

2006年6月30日 連載 (2周目!・上古神代～水の大陸)

根源未詳。かの四世界鎖国時のどさくさに紛れてアトル・アン・ティス中西部森林地帯、通称《谷》に定住していた。精霊の力や大地の不思議に関して優れた知識を持つので、史学上、しばしば天人族エルシャマーリヤの系統と解されていたが、複数神信仰や後世における一処不住性など、それでは説明のつききらない特質・属性を多く持つ。また惑星リスタルラーナへ漂着した移民船フェアリスティラーヤの乗客中、単性長寿のイシール族、これは人種的特徴から推して明らかに天人族であろうと思われるが、史略初期に示される行動形態にはむしろ《白の一族》にこそふさわしい大胆さと情愛の深さが見られる。実験的に創造された種族かあるいは異界からの移住民であるにせよ、おそらくその起源は天界エルシャムリアの時代に遡って求めるべきであろう。上古の資料を入手する術がないのが残念である。リステラス辺境、惑星《緑》おまび《白沙》における同系の文化も、どの時点での移民の成果であるのか現在のところ不明である。

☆ 惑星《地球》における史略。

アトル・アン・ティス中西部森林地帯の北辺、大河スウェンの上流域《谷》における定住時代が、現在判明している限りでは最古のものである。当時は《白の》とは自称せず、サンサラ、《谷の一族》という呼称が使われていた。四囲を深く広大な森林に守られて、平和な狩猟・採集・農耕の時代が長く続き、安定した芸能文化が発達していた。が、この時点で既に、一族の漂着の伝説と流浪への予言が存在していたという。来たるべき存亡の危機に際して一族の守り手とする為に戦士の村ザグに才能ある者を送る SEND・レーサなる伝統があり、活火山カリンシカの隆起により東方との交易の道を断たれて後は、帝国の臣領として少数の優れた戦士を提供し続けた。

《異界からの侵入者》ゼクトにより帝国が一時瓦解した際、広大な森と谷から焼け出され、難民の群れと行を共にした一族は、その後、戦乱が収束してからも再び安住の地を持つとはせず、《白》を最首とする各色の派にわかれて大陸内を流転し、各処でその芸能や知識によって生活の糧を求めた。

星船来襲によって大陸もろとも帝国が失われた後、長い時代を彼らはその時代その土地に合わせて生きのびてきたが、ユーラシア全域を結ぶ東西交易の路が開けると各色支族は商人や旅芸人と紛れて再合流し、また大航海時代と共に惑星規模での血族結社となった。ただし、最首たる《白の一族》が好んで版図としたのはアフリカ北西部から中国奥地にかけての乾燥地帯であり、どのような死の砂漠も徒手空拳で渡る不死の一族、また、水枯れの年にどこからともなく現れて水の間を復活させる魔法の歌と舞の一族として、周辺諸族の畏敬を受け、多くの土俗的信仰に

半神として受け容れられた。また、中東地方において唯一神教が流布した後には、超人的な力を持つ異教の魔神として、誇張された説話の中に《白の一族》と覚しき事跡が散見される。その他、下層支族である《緑》や《紫》は流浪芸人や流しの職人としてしばしばジプシー部族とその存在を混同視され、《茶》は多くが商人や奴隷に溶け込み、《青》は海洋民として、南太平洋諸島を根城に世界へ出て行った。

第三次大戦終息直前、多くのESP者を輩出した時代、《白の一族》から独立した《黄金》のイルレーナがESP者の同盟《ア・ルーヴァ・タウレ》を建国、各支族の生き残りの殆どがこれに参加し、一族としては発展的解消をとげた。地表に残った者は新たに部族外の者も加えて《灰色の一族》アイン・ヌウマを名告り、極東草原地帯に広大な遊牧の版図をかまえたが、惑星政府統一に際し部族の解散を宣した。

○ 史略上の重要な人物 ○

1. ハユン家のアマラーサ、及び、アグニス家のトゥード

カリンシカ交易路が断たれる寸前、最後の児童送遣（センド・レーサ）として戦士の村ザグへ送られた2人組である。どちらも優れた戦士であり、慣習に基づく婚姻によって《谷》の血統をザグの村に伝えるものと思われていたが、ハユンのアマラーサは発心して月女神レリナルディの巫女となり、全ての人界の掟から解き放たれた聖戦士となった。

《谷》を守る大河の精霊スウェナ・ラディが《砂漠の王》に略奪された際、同じくスウェナの対者として《谷》を守る風の精霊フエンがアグニスのトゥードに一族の危急を告げ知らせ、アマラーサの助力を得た彼は《砂漠の王》と戦い、スウェナを解放した。この旅の後、2人は再びザグの村へ戻ることはなく、生涯を共に漂泊のうちに過した。隆起後のカリンシカ連峰を最初に踏破して交易路を再開し、各地で住民を悩ます邪竜や悪王を退治した等、伝説に語られる武勲譚は数多い。また、月読み峠のレリナル神殿を訪ねたアマラーサは、女神及巫者集団である月読み衆との問答によって宗教史に新たな展開をもたらし、婚姻によらない個人の意志に基づいて出産した最初の巫者となった。

(>月女神信仰の項、参照)

(>女戦士 リィ・カタナ)

2. ディア家のディカール、

(もしくは帝国風にディカール・デュア・ディアレスト)

帝国の臣領としての《谷》の時代の末期、武家の子弟として兵教育を受け、トゥリアンギア公領に配された彼は、~~いくつかの偶然から~~不遇の公子ミアルドと出会い、その対者（ミトラ）となった。父帝崩御の際に異母兄たる新帝からの処刑命令を察して国を落ちた公子に付き添い、《谷

》へと抜ける森の旅に出るが、途上で異界者ゼクルディ族の帝国侵攻を知り、唯一の帝位後継者となった公子を守って帝領奪還の長戦を指揮した。同時期にゼクルディの放火により《谷》は消失したが、彼はそれを救えず、以後、流浪する一族のもとに戻ることもなかった。晩年は帝位を回復したミアルドの腹心として、また公子の養育係として仕え、自らは子をのこすことなくその生涯を閉じた。伝記には生年及び性別に関する記述に混乱があり、あるいは兄妹もしくは双生児による業績だったのかとする説もある。

(>対者思想(ミトラ・タ・ヴィアタ)及び三身の法の項、参照)

3. ミーニエ・マリセ・ブランチェスカ=ガクト・イソハラ (磯原マリセ)

生粋の白の一族として砂漠に生まれたが、少女の頃に縁あって欧州人のキリスト教宣教師の養女となり、フランスで医学を修めた後、国連所属の野戦(従軍)看護婦として難民及びゲリラ軍の救護に努めた。その地で遭難し奇跡的な生還をとげた世界的な報道カメラマンであった磯原岳人の妻として日本国へ帰化して四児の母となり、障害児施設に勤務するかたわら、緑慶年代の同国の暮らしについて優れた手記を残した。黄金のイルレアーナの《血の濃い(両縁の)》従姉であり、磯原清の実母であるとされている。

4. 《黄金》のイルレアーナ (アルヴァトーレの太后母)

第三次世界大戦さなかの混乱期に白の一族として生まれたが、あまりに強すぎるそのP能力のゆえに長老たちにその存在を受容されず、自ら独立して《黄金》を名乗った。《ムーンII》衝突回避の際、アルカス・アルヴァトーレの呼びかけに最初に応じたひとりで、以後、彼と共にESP者のための王国建設に力を尽した。アルヴァトーレ大公国の初代公女ヘスティアは、2人の遺伝子から造られた人工授精体である。

(>アルヴァトーレの項、参照)

5. 磯原 清 (キーヨ・エ・ミーニエ)

外部に嫁したミーニエ・マリセの末子であるので正確には一族の者ではない。緑慶年代の日本国に生まれたが、月に遺されたエルシャムリアの母思考機械リーシェンによって仲間と共に時代を運ばれ、最終戦争中期のアルヴァトーレに転籍した。最盛期のアルカスに匹敵するP能力を持つことからその再来と呼ばれ、宇宙植民者連合軍ゲフィオンに協力。戦闘中死亡した。ゲフィオン隊長・杉谷好一の妹であるユミコ・フェア=スギタニとの間の一児、杉谷 狼 は、後に地表上で《青狼伝説》団を結成、《灰色の一族》に合流した。

(>最終戦争の項、参照)

6. 蘭家の冴夢 （サエム・ラン＝アークタス）

《最終戦争後》と呼ばれる時代の末期、極東草原地帯全域をその版図とした《灰色》＝《人間の一族》アイン＝ヌウマの最後の族長であり、地球統一政府との戦争を、その使者ヨセフィア・アークタスとの婚姻によって回避。部族の解散を宣して新らしい時代へと溶け込むよう主張し、自ら範を示してシゾカ市へ移住した。吟詠詩人として名高かったが、二女を残し夭逝した。

7. サキ・ラン＝アークタス （蘭家の咲子）

解散を宣した後の、部族外との婚姻による出生であるので、自らを一族の者とは認めなかった。サエムとヨセフィアの二番目の娘であり、第一期官費留学生となって地球を離れ、生涯の殆どをリスタルラーナで過した。科学者マリア，ソレルの腹心として働き、鎖国を続けていたアルヴァトーレ女王国との間に国交を回復させ、その地を借りてESP者の訓練校、エスパッション・スクールの開設に力を尽した。その後、深宇宙探査船に同乗し、子供を残すことなく消息を断った。

(>エスパッションの項、参照)

☆ 惑星《白沙》（しろきすな）における史略 ☆

『水の大陸』 ～白の谷から十色の民へ～

2006年4月22日 [連載](#)

とある惑星上の、先住民からは《水の島》と呼ばれる原始大陸の北西平原（大河沿いの沃野）に、ある時、いずこからか忽然と現れた謎の民族が、定住し、以前の文明（技術）を失いつつも、先住民よりは一線を画した高い文化を保持したまま、長い時代を経て、やがて、白の民からの影響をも受けつつ独自の文明を発展させた《帝国》の興亡とともに谷を離れ、分離集合を繰り返しつつも血脈を保って現代に続く……という話。

年代記という形で小説に書ける量とも思えない★ あくまでも伏線とゆーか、ほのめかし程度で終わる設定なのかも……★

(=_=)(=_=)

と、ということで、駆け足で『水の大陸』編、終わり!!

!(^^)!

エブリスタ主催「マンガボックス原作賞」

(2017年7月31日〆切)

に応募したやつが、こっちに入ってます。



http://estar.jp/_novel_view?w=24671574

リステラス星圏史略
古資料ファイル
1 - 3 - 3
《ハユンのアマラーサ》

<http://p.booklog.jp/book/107591>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107591>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107591>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ